

二年学年だより

No. 5

9月号

令和7年8月21日発行

204HR

「君はなぜ英語を学ぶのか？ It's up to you.」

「英語を学ぶ理由」当然それは人それぞれであり、その人が置かれた状況次第だろう。高校時代の私にとってそれは大学入試で「避けては通れない難敵」に過ぎなかった。たぶん多くの高校生にとってもそうだろう。結局英語に関して何の興味関心も湧かずに卒業し、大学四年間も友人が海外留学やTOEIC受験などに熱を上げている傍ら、私はサッカー三昧で、特段英語に触れた記憶もない。しかし、就職後転機が訪れた。挑戦したかったプロジェクトに手を挙げ、送り出された現地の子会社で、一人だけ英語が満足に使えず交渉を上手く進めることができなかった。会社は目に見えてグローバル化していき、自社工場の外国人労働者とうまくコミュニケーションを取れず「これではさすがにまずい。」と痛感させられた。これが当時の私が英語を学ぶ動機となった。

会社を辞めて海外留学をした際、現地でアジア・ヨーロッパ・南米の様々な人に出会った。勉強中の拙い英語で彼らと会話する中で、国や地域による文化や考え方の違いに触れ、日本で当たり前であると思い込んでいたことが、実はそうではなかったというものがたくさんあった。印象的だったのは、同い年のブラジル人チアゴとの出会いだった。当時の日本はまだ終身雇用が当たり前で、離職するのは珍しかったように思う。そして、日本の友人が死に物狂いで働いている一方で、私は30歳を目前に無職となり、海外で「夏のクリスマスにサンタがビーチでサーフィンしている！最高～！」とか言っていた。しかし、心の中では、自分は本当に大丈夫なのだろうかという不安に駆られていた。その思いをチアゴに打ち明けた際、彼はこう言った。「人生は楽しまないといけない。そして、今おまえは外国で最高の時間を過ごしている。これはまた新しいスタートを切れるチャンスだ。Everything's gonna be alright.」当時、日本の価値観の中で「～でなければならない」という一面的な考えに凝り固まっていた私には衝撃的だった。ちなみに、ブラジルで彼はその時点で5回転職をしていたらしい。そんな彼も今では石の採掘事業を立ち上げ、ブラジルで大成功している。

この経験で学んだことは、異国の異なる考え方を知ること、自分の視野が広がったり、物事を様々な角度から捉えられたりするようになるということだ。その際、英語は最強のアイテムになることは間違いない。そして、様々な物の見方や考え方を知することは、人生における困難を柔軟に考えて乗り越えるためのヒントとなり得る。今の私が思う「英語を学ぶ意義」に対しての答えはここにある。皆さんにも、英語を通して世界中の異文化や考え方を直に知ること、自分の人生を豊かで、楽しいものにしてほしいと願っている。

(204HR担任)

「異文化に触れる旅の中で」

高校2年生と共に修学旅行で訪れたシンガポールとマレーシア。この3泊4日の旅は、単なる観光では終わらない、心に深く残る異文化体験の連続だった。

シンガポールではチャイナタウンやアラブストリートを訪れ、わずか数ブロック歩くだけで全く異なる文化圏に入り込むような感覚を味わった。寺院の香り、モスクに響く祈りの声、多様な言語と表情。そこに流れているのは、多民族国家ならではの調和と緊張が共存する空気だった。

マレーシアでは、現地の家庭を訪問したり、スーパーで買い物をしたりする中で、日常の暮らしに息づく文化を間近に感じた。観光名所だけでは見えない「ふつうの生活」にこそ、その国の豊かさや魅力があることを学んだ。

今回の旅で心によみがえったのは、幼いころテレビで見ていた「兼高かおる 世界の旅」の記憶だ。あの番組を通して、まだ世界や国家の意味も分からないままに、テレビの向こうに広がる異文化に胸をときめかせていた。あの時感じた「世界への好奇心」は、年月を経ても自分の中で消えていなかった。

18年前にも訪れたシンガポール。しかし、今回の訪問で見たのは、あのころとはまるで違う、観光立国として洗練されたもう一つの顔だった。発展し続ける都市と、多様な文化が融合する街並み。懐かしさと新鮮さが入り混じる、特別な時間だった。

この旅を共にした生徒たちと先生、そして支えてくれた日本人・現地の添乗員の皆さんに心から感謝したい。異なる文化や言語の中で、声を掛け合い、支え合って過ごした時間は、かけがえのない思い出となった。

好奇心を持って異文化に身を投じることで、人は何歳になっても、理解し、尊重し合う姿勢を育むことができる。この旅で得たものは、単なる「海外旅行」の枠を超えた、人生の財産だと思う。ありがとう、全ての出会いと体験に。

(204HR副担任)

